

## 幼児の遊び行動の実態調査—おもちゃについての一考察

The fact-finding of a play action of an infant—One consideration about a toy

東4階病棟 瀬戸恵美 若狭亜矢子 水野聡子 大曾契子

### 【要旨】

私達は、病院にあるおもちゃを見直すために、指標として一般家庭では幼児がどのようなおもちゃで遊んでいるかを調査し、検討することにした。その結果、家庭において幼児がよく遊ぶおもちゃは年齢、性別毎に遊びの種類が影響し、購入者の意図がおもちゃに影響することがわかった。適切なおもちゃを選択するには幼児の嗜好と発達段階を把握し、遊びながら成長、発達できるおもちゃを与えることが重要であることが明らかになった。今後病棟での実態と合わせ、おもちゃの購入に取り入れていく。

### 【キーワード】

幼児 遊び おもちゃ

### I. はじめに

当病棟に入院する幼児の8割以上が1ヶ月以上の長期療養を余儀なくされている。私たちは昨年度、入院中の幼児に焦点を当てて遊びの実態調査を行った。その結果、遊びの影響要因は場所、時間、遊び相手ということがわかった。及川<sup>1)</sup>は「遊びのための環境には、遊べる場所と遊びのための道具、遊び時間の確保が必要」と述べている。病棟内には遊べる場所としてプレイルームがありおもちゃもあるが、発達段階を考えて意図的に環境を整えているものではなかった。今回はその結果を踏まえ、病棟の遊び環境の充実を図るためおもちゃの見直しを考えた。そこで、見直しの指標として実際に一般家庭ではどのようなおもちゃが使われているか傾向を明らかにするための実態調査を行ったのでここに報告する。本調査の目的は幼児が遊んでいるおもちゃの傾向を知り、病棟での遊び環境の援助に生かすことである。

### II. 調査方法

#### 1. 調査対象

2003年12月にA保育園に入園している3歳から6歳の園児212名

#### 2. 調査方法

質問紙によるアンケート調査—対象者に質問紙を配布し保護者に書面で記入を依頼した。回収は郵送とした。

### 3. 期間

2003年12月中の休日の1日

### 4. 内容、分析

普段遊んでいるおもちゃについて種類、使用頻度、購入時の考慮点、数、購入者について質問し、年齢、性別ごとに検討

### 5. 倫理的配慮

保護者に研究の主旨を書面で説明、回答は任意である事、個人が特定できない事を示した。質問紙は無記名、郵送による回収とした。

## Ⅲ. 結果

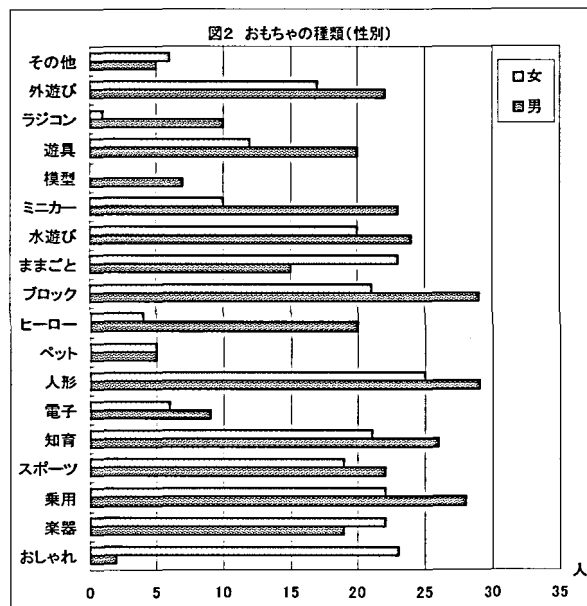
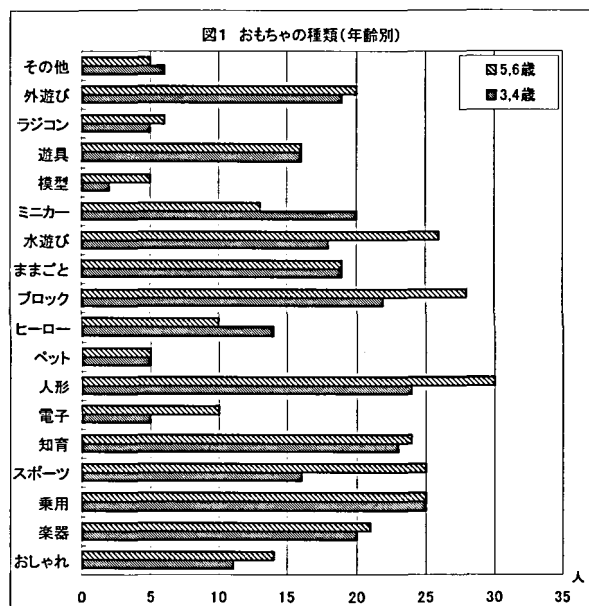
対象児の属性：回答者は56名、内訳は次の通りであった。

(年齢別) 3・4歳児26名 5・6歳児30名

(性別) 男子31名 女子25名

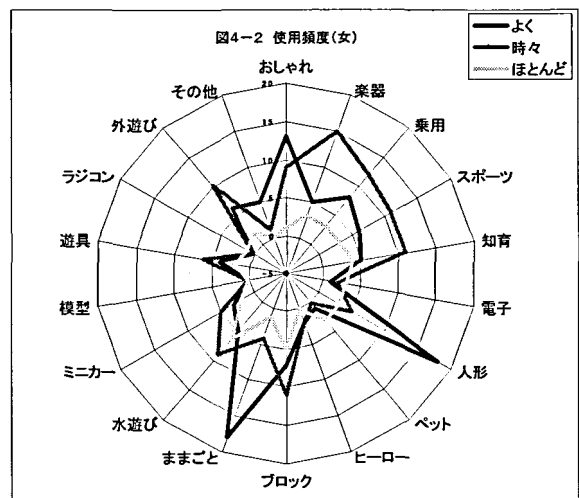
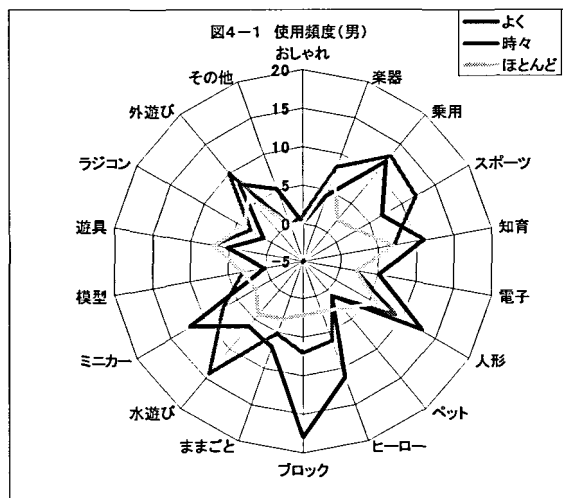
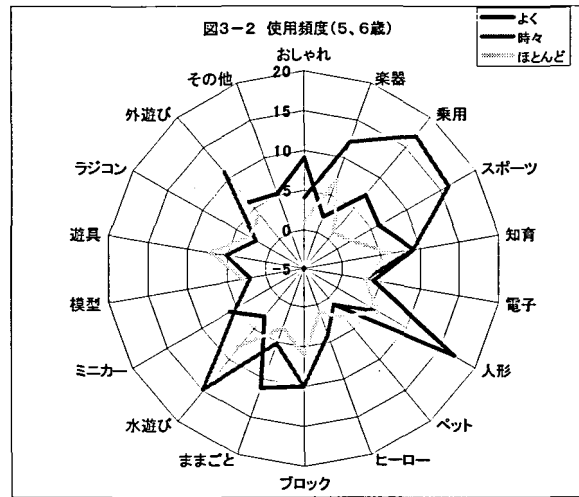
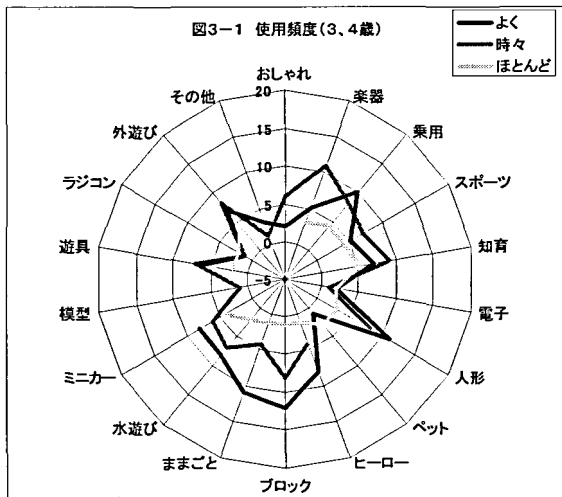
### 1. おもちゃの種類

スポーツ玩具、電子玩具、人形、ブロック、模型は所有者の年齢が高い傾向にあるが、ヒーロー玩具は所有者の年齢が低い傾向にあった。乗用玩具、知育玩具、ヒーロー玩具、ブロック、ミニカー、模型、大型遊具、ラジコン、外遊び玩具は男子が持っている傾向が高く、おしゃれ玩具、ままごと玩具は女子が持っている傾向が高かった。(図1、図2)



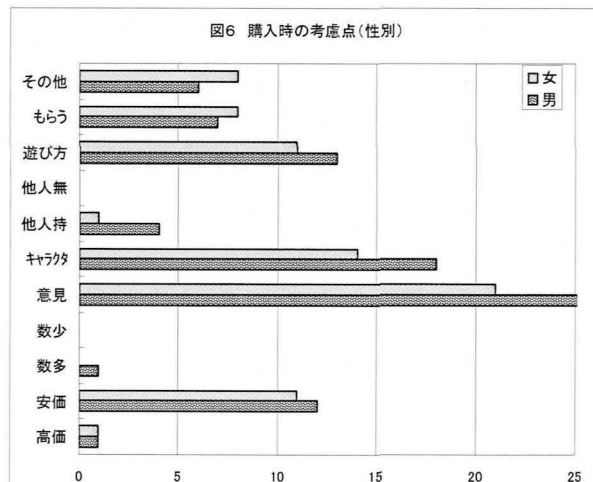
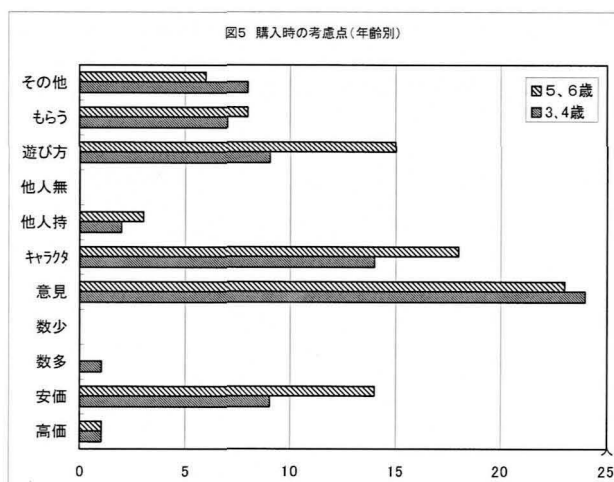
## 2. 使用頻度

3・4歳では使用頻度にあまり偏りがなく、いろいろなおもちゃで遊んでいるが、5・6歳では使用頻度に偏りがあり、特定のおもちゃで遊んでいることが分かった。よく遊ぶものは、3・4歳では乗用玩具、人形、ヒーロー玩具、ブロック、ままごと玩具、ミニカーで、5・6歳ではおしゃれ玩具、人形、ままごと玩具であった。(図3-1、図3-2) 男女の比較では、種類の比較において、持っている傾向が高いものは使用頻度も高い傾向にあるということが分かった。男子では知育玩具、人形、ヒーロー玩具、ブロック、ミニカーの使用頻度が高く、女子ではおしゃれ玩具、人形、ままごと玩具が高かった。(図4-1、図4-2)



### 3. 購入時の考慮点

考慮点において多かった項目は、「子どもの意見を聞くこと」「好きなキャラクターであること」「遊び方を考えること」「安価であること」であった。5点以上差があったものは年齢において「安価であること」と「遊び方を考えること」についてだったが、男女の比較において5点以上差のあるものはなかった。年齢の高いほうが低いほうに比べ値段、遊び方を考慮していた。(図5、図6)

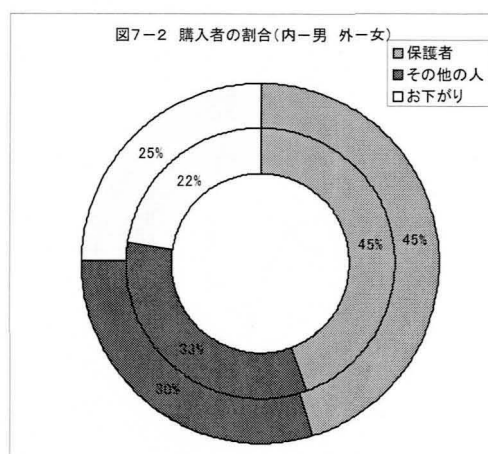
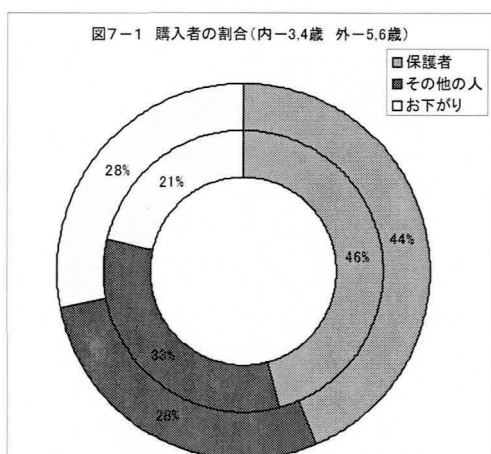


### 4. おもちゃの数

個体差が3個~300個以上と大きな開きがあり、持っているおもちゃの数からの傾向は見えにくかった。

### 5. 購入者の割合

年齢別、男女別とも半数近くのおもちゃは保護者が購入していた。お下がりには全体の5分の1程度を占めており、新品でないおもちゃも使われていることが分かった。(図7-1、7-2)



#### IV. 考察

集計結果よりおもちゃの種類と比較において、年齢が高くなるにつれて使用時に緻密な操作や知能、行動を要求される物を持つようになっており、家庭において、成長、発達に合わせたおもちゃが選択されている事が伺えた。また、成長、発達に伴い遊び方に男女の違いが出てくることが推察された。年齢や性別による遊び方の違いが使用頻度の違いであり、気に入ったおもちゃにこだわって遊ぶという行為が、年齢が高くなるにつれて顕著になるため年齢差において使用頻度における偏りが出たと思われる。また、購入時の考慮点から、購入者は子どもの成長に伴いおもちゃの選択に気を遣っていることが分かった。持っているおもちゃの数は人それぞれで、数の多い、少ないだけでは遊んでいるおもちゃの傾向は分からなかった。また、主要な購入者は保護者であることから、家庭でのおもちゃの選択権は保護者にあり、保護者が子どものどのようなおもちゃを与えるかという意識が非常に大事であると推察できた。入院中の幼児はおもちゃと関わるが多いため、成長、発達を促す上で病棟にあるおもちゃの内容は重要な位置を占める。幼児のおもちゃの選択は、身近にいる者が選択権を持ち重要な役割を果たすため、多田<sup>2)</sup>の述べているように「周りの大人が、個々の子どもたちの興味や関心を見逃さず、発達段階に合う遊びを提案しながら一緒に遊ぶ」ことが大切である。幼児期の成長、発達の間からみると、3・4歳児頃は言葉の発達が最も顕著であり、身体的には次第に器用になってくるため、毎日お話の時間を設ける、体全体を使った運動遊びを取り入れる等の援助が有効である。また、5・6歳児では就学できる段階まで発達しているため、集団遊びなどで自分から進んで友達と遊べる機会を作る必要があり、運動性、社会性の発達を促すためにも、入院中も他の子どもと遊ぶ機会を増やすことが大切である。このような成長、発達を考慮した遊び環境の調整を計画的に行っていく事が課題であるが、幼児の遊びの範囲は幅広く、遊び全体の傾向を把握するには内容や遊び相手に関しても調査する必要がある。まずは今回の結果を実際にプレイルームのおもちゃの改善に生かし、看護師がおもちゃを通して個々の発達段階に合った遊びを取り入れるなど、病棟での遊びの援助をより具体的にしていきたい。その上で遊びの内容、遊び相手について分析し、病棟の遊び環境をよりよくするための指標にしていきたい。

#### V. まとめ

- ① 幼児がよく遊ぶおもちゃは年齢、性別毎に遊びの種類が影響し、使用頻度に反映される。
- ② 購入者の意図がおもちゃに影響するため、どのような目的を持って幼児におもちゃを与えるかが大切である。

- ③ 適切なおもちゃを選択するには幼児の嗜好と発達段階を把握し、遊びながら成長、発達できるおもちゃを与えることが重要である。

#### 引用文献

- 1) 及川 郁子：病気や入院による遊びへの影響とケアの考え方、小児看護、27(3)、303-307、2004
- 2) 多田 千尋他：入院中の子どもの力を引き出すおもちゃ、小児看護、27(3)、258-264

#### 参考文献

- 1) 牧洋子、井上恵美子、阿部智美：医療者の遊びへのかかわり、小児看護22(4)、434-439、1999
- 2) 中村 崇江他：一般的な発達段階を踏まえての遊びとかかわり—乳児期後半と学童期・思春期の事例を通して—、小児看護27(3)、313-317、2004
- 3) 高橋 由紀子他：緊急入院した子どもへの遊びの援助—情緒ストレス反応を評価して—、第32回日本看護学会集録(小児看護)、2001
- 4) Weller. B. F. (鈴木敦子他、訳)：病める子どもの遊びと看護、医学書院、東京、1988.